

# 王漁洋の作詩における神韻への意識

—蜀道集と雍益集を対比して—

品川理恵子

「神韻説」の提唱者として知られる王漁洋（一六三四—一七一）は、清朝初期に活躍し、一代の正宗と称せられた如く、唐詩を踏襲し、更に彼独自の詩的美意識を余す所なく表現した詩を今に残している。彼の詩文は『帶経堂集』に収められ、その詩の総数三千余首のうち一千数百首余りが、門人盛符升・曹禾の懲憲により選定された『漁洋山人精華錄』十二巻に収められ、広く通行している。

漁洋が、その後年において自覚的に唱えた「神韻説」については、主に、嚴羽及び司空団の言葉によつて説明される。漁洋文卷一、「唐賢三昧集序」にいう、

嚴滄浪 詩を論じて云ふ、「盛唐の諸人は、唯だ興趣在るのみ。羚羊角を掛け、跡の求むべき無し。透徹玲瓈として、湊泊すべからざること、空中の音、相中の色、水中の月、鏡中の象の如し。言は盡くること有れども、意は窮むる無し。」と。司空表聖 詩を論ずるも亦た云ふ、「味は酸醸の外に在り。」と。康熙戊辰、春杪、京師より歸り、寶翰堂に居る。日に開元天寶諸公の篇什を取りて之を読み、二家の言において別に會心有り。其の尤も雋永超詣なる者、王右丞より下四十二人を錄し、『唐賢三昧集』を爲る。

右の嚴羽の言葉は、『滄浪詩話』詩弁にみえる文章であり、司空団の言葉は、その「與李生論詩書」(『司空表聖文集』卷二)にみえる文の意をとったものと思われる。右の序文に言つてゐる様に、漁洋は、これら先人二人の言葉を自らの文學主張として、康熙二十七年、五十五歳の時に『唐賢三昧集』を編んだのである。

漁洋は「神韻」を説明する際、「味外の味」や「興趣」という言葉をしばしば用いてゐるが、それらは以上の文に基づくものなのである。つまり、彼の詩においては、「興趣」—嚴羽の言葉を以て説明すると、それは羚羊が夜寝る時、角を樹にかけてその痕跡が求められない様な、また空中の音、物象中の色、水中の月、鏡中の像の様な、透明でとらえがたいものである—を得て、言葉は尽きても、その心が無限大の広がりを持つた詩こそがその理想であり、また、司空団の言葉を借りれば、食物においては、酸醸の外にある分析しがたい風味||「味外の味」が尊い様に、一つ一つの文字より成る詩では、その文字全体から象徴される情緒こそが尊いのである。

本来「神韻」という言葉は、漁洋以前にも明の孔天允が謝靈運・孟浩然・韋應物らの詩を評するのに用いており(青木正児著『清代文学評論史』)、またその概念も、前述の如く、すべてが漁洋独自のものとは言えないが、しかし、それを本格的な詩論として確立し、自らも多く秀れた詩を残していることが、漁洋が神韻説の提唱者といわれる所以なのである。

では、実際に「味外の味」を得た詩とはどの様な詩をいうのであらうか。漁洋が編纂した『唐賢三昧集』の中から、高適及び岑参の詩をその一例として挙げてみる。

雪淨胡天牧馬還 雪は淨し 胡天 馬を牧して還る

月明羌笛戍樓間 月は明らかに 羌笛 戍樓の間

借問梅花何處落 借問す 梅花 何れの處にか落つ

風吹一夜滿關山 風吹いて 一夜 關山に満つ

(高適「塞上聽吹笛」)

西原驛路挂城頭

西原の驛路 城頭に挂る

客散江亭雨未休

客散じて 江亭 雨未だ休まず

君去試看汾水上

君去りて 試みに看よ 汾水の上

白雲猶似漢時秋

白雲猶ほ 漢時の秋に似たり

(岑參「虢州後亭送李判官使赴晉絳」)

前者は、高適が哥舒翰の幕下で、辺境にあつた時の作。梅の木などない胡国で耳にした落梅花の笛の音や、国境の山々に風に吹かれて散つた梅の花びらが満ちあふれている様を詠んでおり、限りない郷愁にかられた作者の心が深く伝わってくる。また、後者は、岑參が虢州長史だった時、李判官が晉州・絳州に使いするのを送つた送別の席で、「秋」の韻字を与えられ作つたもの。詩中に秋を直接的に詠むことはせず、漢の武帝の「秋風の辞」の「秋風起つて白雲飛び、草木黄ばみ落ちて雁南に帰る」の句を踏まえることで、間接的に秋を歌つている。どちらも平淡な描写の中に、郷愁や秋の風情が言外に象徴的且つ効果的に歌われている。

次に、漁洋自身の神韻の作としてしばしば例にとられる作を紹介する。これらは、『香祖筆記』卷一に、『味外の味』を自得したものと漁洋自身が述べているものである。

青山 (『訓纂』<sup>(1)</sup> 卷五上)

晨雨過青山 漠漠寒煙織 晨雨 青山を過ぐ 漠漠として 寒煙織る

不見秣陵城 坐愛秋江色 見ず 秕陵城 坐に愛す 秋江の色

卽目 (同卷五上)

蕭條秋雨夕 蒼茫楚江晦 蕭條たり 秋雨の夕べ 蒼茫として 楚江晦し

時見一舟行 濛濛水雲外 時に見る 一舟の行くを 濛濛たり 水雲の外

惠山下 鄒流綺過訪（同卷五上）

雨後明日來 照見下山路 雨後明月來り 照見す下山の路  
人語隔谿煙 借問停舟處 人語谿煙を隔つ 借問す舟を停むる處  
雨後至天寧寺（同卷九上）

凌晨出西郭 招提過新雨 晨を凌して西郭を出づ 招提新雨過ぐ

日出不逢人 滿院風鈴語 日出づるも人に逢はず 院に滿ちて風鈴語る

「青山」は漁洋二十七歳、江南揚州府推官の時、揚州での作。青山は揚州江都県西方にある山。秣陵城は南京の城郭をいう。「卽目」はやはり同年、江南鄉試の同考官として南京へ赴く途中の船上での作。「惠山」の作は、二十八歳、揚州府推官の時、直指使者に謁するため松江にゆき、蘇州から太湖に遊び、無錫を過ぎり惠山に登った時の作。そして、「雨後」は四十九歳、国子監祭酒の時、北京の宣武門の外にある天寧寺を訪れた時の作。右の四篇は、いずれも漁洋を中心とした周囲の情景を詠んだもので、全体から作り出された情景が、視覚的且つ聴覚的立体感を持った一つの美の世界として感じられる。つまり、それぞれの場面に「晨雨、寒煙」「秋雨」「雨後、谿煙」「新雨」という語を意識的に用いてはいながら遠近の位置関係で登場させ、また他の三篇は、舟に乗っている漁洋、月明りの中、下山する漁洋、朝靄の中、天寧寺に向かう漁洋自身をそれぞれ詠み、場面の移り変りを感じさせることで、視覚的に奥深い立体感を持たせ、それを一つの美的世界に作り上げ、その中に秋愁や静寂さという情緒を抽象的に詠い込んでいく。また、これららの詩が、みな五言絶句という定型詩では最も語数の少ない形で作られているということは、少ない語句で限りない情緒を詠むという漁洋の試みの結果とみられないでもない。以上の四篇はいずれも、漁洋自身が自認している通り、彼

の理想とした味外の味を得た神韻の作の典型といえる。

以上、神韻とその作についてその特色をまとめてみると、(1)心理状態の平静さを尊重し、(2)近視眼的な見方でなく、絵画的で且つ奥行きのある世界であり、(3)断定することなく、ある種の曖昧さ(=余韻を持ち、無限の響きを求める、(4)常に物象と不即不離であって、因淡白さと清遠さを愛する、という姿勢があるということになる。

では次に、漁洋はその詩に何を抽象的に詠んでいるのだろうか。これについて、彼の作を多く読むうちに、それが事象すべての中には存在する悲哀、愁いではないかと直感する。言い換えれば、人間の存在そのものに根差す茫漠とした悲哀、愁いである。人生即詩作としていた先人達が、多く人との別れや、政治的挫折等々の悲哀や愁いを具体的且つ直接的に歌いあげ、詩をそれらを表現する為の手段としていたのに比べ、漁洋にとっては、その詩論からもわかる様に、それらの悲哀や愁いを直接的に歌うことは、彼の説に反するものであった訳である。従つて彼は、詩を手段としてではなく、人間の悲哀をテーマとする芸術美を体現する場として強く意識していたものと考えられる。この詩(=芸術)という意識こそが「神韻説」を意味づけるものではないだろうか。

漁洋がその姿勢として、具体的に悲哀を歌わなかつたことについては、それが彼の生きた時代——つまり、満州民族による漢民族の征服下で、漢人の役人、詩人として生き続ける為の沈黙によるものであつたという解釈が一般的であり、例えば、先にあげた「惠山」の詩には、一種非政治的な姿勢がみえると、高橋和巳『王士禛』(中国詩人選集)中に指摘されているが、確かにそれが一つの要因であつたとしても、それ以上に、漁洋自身が、それまで人生などを語る為のものであつた詩を、それ自体独立した形で追求した結果のものであつたと思う。

さて、以上で漁洋の詩論について述べた訳であるが、その「神韻説」を踏まえ、本稿の主題である、その詩論と作風について考えてゆきたい。実際に、その詩論が彼の三千余首の詩にどの様に反映しているだろうか。このことは、彼が

詩を作るという作業を、いわば自分という主体的立場から一定の距離をおいて行うことを理想としている点からみて、また、感受性の鋭い漁洋が、その私生活において数々の別れを経験している点からみて、その詩がその詩論のもとに置いて、年代の変化と共にどのように変化したかという事が、とても興味深い問題と言える。つまり漁洋の理想とする詩が、常に心の平静さを要求し、高次元に昇華された美を歌いあげているという点から考えて、作る側の漁洋にとっては、かなりの精神的余裕が必要であったと想像され、もしそうならば、そういう精神状態をその青年期から老年に至る間、変らず持ちえたと思うことは、かえって不自然だからである。この点から考え、実際に漁洋自身が自ら神韻を得たものとしてあげている作品が、恐らくその氣力が充実し、詩作意欲に燃え、また最も感性の鋭い二十代後半の時期に集中している点、そしてその後、壯年老年における詩の作風が、二十代頃のものとどこか違う点があること一こうした作風の変化について、漁洋自身回想している言葉が俞兆晟の「漁洋詩話序」に引かれている一に、必然性があったと考えられる。

以下では、その後年において自覚的に唱えた神韻を、実は最も強く意識し、事実そういう作が一番多く、彼をして神韻説の提唱者といわしめた詩作の充実期が、その青年期にあつたという前提のもとに、その後の変化を、壯年期の代表として蜀道集、老年期の代表として雍益集をとりあげ、考察してゆきたい。

## 二

蜀道集は、漁洋が三十九歳、戸部福建司郎中の時、四川鄉試の主考に命ぜられ、康熙十一年七月一日より十一月に亘る四川への旅途中に詠んだ詩を編したもので、その詩数凡そ三百五十篇。三十九歳といえば、人生半ばで最も氣力の充実した頃であろうが、漁洋にとっては、その時期の私生活を見ると、まさに人生の峰にあたる頃であったと思われる。

「誥封宜人先室張氏行述」（帶經堂集卷四十九漁洋文十一）の冒頭にいう、

ああ、私はここ數年来、たて続けに身内の不幸に遇つた。そしてその深い悲しみを共に慰め勞り合つたのは、一人糟糠の妻だけであつた。ところが、その妻が今まで突然死出の旅にしてしまつた。幼くして母を失つた子供達は、母を求めて泣いてゐるが、その人に聞こえようはずもない。そして折しも、私はただ一人千里の旅にしており、<sup>(2)</sup> 帰りたく思つても叶わず、かといってじつとしていられようはずもない。私は人生半ばに至つて、天は常に善人に福を与えるものとは限らないことを知つた。思うに、夫婦となつて以来二十六年間、私は甘苦患難を一つとして、妻と共にしないことはなかつた。……

張氏とは、漁洋が十七歳の時迎えた妻であり、十四歳から四十歳で亡くなるまで、心優しく夫によく尽くす、糟糠の妻の名にふさわしい女性であつた様だ。右の記述は、この度の四川旅行の四年後、康熙十五年に、その愛する妻を亡くした時の悲しみをつぶさに記したものではあるが、この四川への旅は、まさに死期の迫つた病床の妻との別れから始まつたのである。更にその出発の日の別れの模様が「張氏行述」にみえる。

私が任を受けて四川に行く際、再び愛する息子を失い、妻は病身で床に臥してゐたにもかかわらず、私は遠い旅に出ようとしていた。妻は、私が心を痛めることを思いやり、涙をこらえて笑顔を作り、かえつて私を慰め諭し、病氣をおして旅の仕度をしてくれた。衣を縫う刀尺の音と嗚咽が交つてしまい、妻は私がこれを耳にするのではないかと心配していた。七月一日、都を出発する時、妻は無理に起き上がって門を開いて私を送りながら、袂で顔を拭い、これがまるで永遠の別れになる様なあり様であつた。……

この旅の前年に第四子啓沂<sup>ヨウイ</sup>（二歳）を、そしてこの旅の直前の四月に次子啓渾（十七歳）を亡くし、その悲しみの癒え  
る間もなく、旅の出発に際する病身の妻との別れ、これらを背負つて旅立つた漁洋であつた。

一方、雍益集は、六十三歳で戸部右侍郎在任中、西嶽、西鎮、江瀆の祭告を命ぜられ、康熙三十五年正月二十七日より七月までの西国への旅程中の詩を編したもので、その詩数凡そ百篇。六十三歳という老齢での再度の西国行きは、大そう大儀だった様で、その出発に際し作った詩「西嶽、西鎮、江瀆の祭告を命ぜられ、都を出づるに、却つて李容齊相國、陳說嚴司徒、彭羨門少宰に寄す四首」（帶經堂集卷五十八蚕尾続詩四）の第一首に、「若い頃、すでに邛崍山きよらいのある四川の地を旅したのに、この年になつてまた西国へ行かねばならんとは。：途中の山の神々とはかつての顔見知りだが、きっと私の両鬢が秋霜を置いた様に白くなっているのを見て、訝しがることだろう。」と歌つてているのが見える。

この二度の西国への旅程は、往路京師から四川省昭化県あたりまでほぼ同じである為、それぞれの集にみえる同じ場所で作った詩を対応させ考察することで、蜀道集と雍益集の作風の違いを考えてみる。

先ず、陝西省鳳翔県の西南、宝雞県あたりでの作。蜀道集のそれは、旅行記『蜀道駅程記』によると、康熙十一年七月二十九、三十日、雍益集の方は、同旅行記『秦蜀駅程後記』によると、康熙三十五年四月三日頃の作とわかる。

蜀道集に「寶雞道中」と題する一篇がみえる（『訓纂』卷六下）。

時序颶已變 征蓬何處休 時序颶として 己に變じ 征蓬 何れの處にか休せん

遠天吳岳影 斜日渭川流 遠天 吳岳影じ 斜日 渭川流る

雲棧餘高鳥 磻溪有釣鉤 雲棧 高鳥を餘し 磻溪 釣鉤有り

龍鍾三十九 白盡老夫頭 龍鍾三十九 白盡す 老夫の頭

時候の移り変りは早く、風に吹かれて飛ぶ蓬の様に、私は一体どこまでいったらこの身を休めることができるのか。暮れかかた遠くの空には、〔数日前通り過ぎた〕吳岳山のシルエットが浮かび上がり、また行く手には、夕日を浴びた渭水が流れている。遙かかなた隴山には、巣に帰り遅れた鳥がまだ空高く飛んでおり、渭水に注ぐ磻溪の上流には、春

秋の昔、太公望呂尚が釣した泉があるという。私も、東坡先生が「龍鐘三十九」と詠じて人生を愁えたまさにその歳になり、この老人の頭は真っ白になってしまったことよ。「龍鐘三十九」とは、蘇東坡の詩（「除夜病中贈段屯田」）『蘇文忠詩合註』卷十二の、「龍鐘三十九、勞生已過半。歲暮日斜時、還爲昔人歎。」に見える句であり、漁洋はこの四句を意識していたのである。

さらに続けて「寶雞県」と題する一篇が蜀道集にみえる（『訓纂』卷六下）。

險絕古陳倉 停車落日黃 險絕なり 古の陳倉 車を停めて 落日黃なり

霸圖今寂寞 陳寶亦銷亡 霸圖 今 寂寞たり 陳寶 亦た銷亡す

城郭秋雲裏 人家清渭旁 城郭 秋雲の裏 人家 清渭の旁

迴看三輔遠 秦樹但蒼蒼 回看すれば 三輔遠く 秦樹 但だ蒼蒼たり

険しい地勢をいただいたこの陳倉の地までやつとたどりつき、車を停めるともうすでに日は傾き、夕日が辺り一面を染めている。かつては、この地をめぐって、多くの者が霸者たらんと策をこらしたものだが、今やひつそりと静まり返り、秦の文公が霸者の印として得た石を祠つたという陳宝の祠もまた滅び去つてしまっている。城郭はすっかり秋めいた雲にすっぽり包まれ、人家は渭水のほとりに見える。今来た道を振り返つて見ると、遙かかなたに三輔の地が望まるが、あとは一面に広がった樹々が目にはいるだけ…。陳倉は宝雞県の古称で、秦の文公が石を得て、その神を祠つたという陳宝の祠があつたことが『史記』封禪書にみえる。

「寶雞道中」の作は、中四句で周辺の風景を詠んでいるが、初めと終わりの計四句は、時の流れの無常さ、自分の人生に対する悲哀が詠まれている。こういう部分は、漁洋が直接的にその心を詠むことのほとんどなかつた青年期の作とは著しく異なる点であり、彼のいう神韻の作とは、言うならかけ離れたものであると思う。また、結句にみえる老いに対

する嘆きは、例えば、蜀道集の褒城県での作に、「褒斜十日の路、白髮忽ち侵尋す。」（「閨七夕抵褒城県」『訓纂』卷六下）と、険しい褒斜の谷を行くうちに、自らの髪が急に白くなつてゆく様を歌い、また眉州（眉山県）での作では、「雜樹紅葉堆うずたかく、蠻荒白頭はくとうを感じ」（「雨發眉州」『訓纂』卷七上）と、秋も深まり、色とりどりの枯れ葉に覆われた雜木林の中、遠く西国へ旅する我が身の白頭が佗しく思われると詠んでいる様に、蜀道集全体を通してしばしば歌われている。蜀への道中の険しさもやはり白髮を生ずる原因であろうが、三十九歳という年齢から見て、やはり前述した様な私生活における精神的打撃がかなり影響していたと考えられ、この様に具体的に、肉体の衰えに対する愁いをはつきりと詠んでいる点は、雍益集の詩にほとんどみられないだけに、注目すべき点である。

以上、前者「賣雞道中」に比べ後者の「賣雞縣」の作は、全体が情景描写であり、更に、落日、秋雲といった沈んだ景色、寂寞、銷亡のマイナーな語句、そして蒼蒼という聴覚的に愁いを呼ぶ語が使われており、時の移り変りに対するそこはかとない愁いが抽象的に詠まれており、本来の漁洋の作風が窺える詩である。

では、次に前二篇に対応する雍益集の作「祀雞臺」（『訓纂』卷十下）をあげる。

東周久已換西秦

東周久しく已に西秦に換る

陳寶何須辨僞眞

陳寶何ぞ僞眞を辨ずるを須んもろひ

猶有漢家使持節

猶ほ有り漢家の使持節

益州遠祀碧雞神

益州遠く碧雞の神を祀る

東周が西秦にとつてかわられたのは、随分久しい以前の事だから、秦の時に祠られたという陳寶の祠が、今さら本物かどうかと議論しても無駄な事だろう。さらに、漢の時にもまだわざわざ使い立てて、遠く益州まで碧雞の神を祀りに行かせている。益州は今の四川省の地をいい、碧雞の神とは金馬碧雞という神のことであり、『漢書』郊祀志に、宣帝

の時、益州にその神がいるというので、さうそく王襄を使いに立て祀りに行かせたという話が見え、転結句はこれを言う。この詩は恐らく、同じ様に西国への祭告を命ぜられた自分を王襄に擬え、随分と「苦労なことよとでも言つて」いる様にとれる。一種朝廷に対する批判の様な詩にもとれるが、それでも全体が叙事的で詠みぶりも淡々としている。さらに深い愁いの影は全く感じられない。

このような傾向は、例えば雍益集「故關」(『訓纂』卷十上)の詩にも表われている。

絶塞依天險 雄關銷地維 絶塞 天險に依り 雄關 地維を銷す

石横千仞壁 松偃萬年枝 石は千仞の壁に横たわり 松は萬年の枝を偃す

盡日無飛鳥 經春臥老熊<sup>(4)</sup> 罷日 飛鳥無く 經春 老熊臥す

槐花秋雨裏 重憶舊題詩 槐花 秋雨の裏 重ねて憶ふ 舊題の詩

峻絶な故闘の塞は、天然の険しい地勢を利用して作られている。この秀れた要塞は、まさに地維の鎖鑰の様に男々しく大地を閉している。大きな石は千仞の絶壁の上に横たわり、そこに松は萬年もの昔からの枝を垂れてい。あまりの俊陥さに終日飛ぶ鳥の姿もなく、春を経た獰猛な老熊が、「その昔、敵を擊退したという王熊を思わせる様に」道のまん中に臥していたりする。さて、私が昔ここを通った時は、秋雨がしとしと降る中、槐<sup>(えんじゆ)</sup>の花が路一杯に開いていた。であったが、今再びここを通り、その時に作った詩を思い出して感無量である。この詩は、山西省太原府平定州の東にある故闘を詠んだもので、その地勢の俊陥さを余すところなく表現しており、また結句では以前ここを通った時に作った詩、つまり蜀道集にみえる「雨中度故闘」<sup>(5)</sup>を懐かしく思い出しているのであるが、蜀道集のその詩がどことなく物悲しいのに比べ、全体的にやはり淡々としている。

次に、旅程は更に進んで、四川省劍閣県の東北、昭化県での詩。蜀道集のそれは閏七月十六日、雍益集のそれは四月

十八日頃の作である。先ず、蜀道集「昭化縣」「昭化夜泊」(『訓纂』卷七上)の二篇をあげる。

亂山圍一縣 哀柝下初更 亂山 一縣を圍み 哀柝 初更に下る

近郭雙江合 扁舟萬里情 近郭 雙江合し 扁舟 萬里の情

浪翻寒月影 風急夜潮聲 浪翻つて 寒月の影 風急に 夜潮の聲

何限人間事 茫茫恨未平 何ぞ限りあらん 人間の事 茫茫として 恨み未だ平らかならず (「昭化縣」)

不揃いに峙え立つ山々に囲まれたこの四川の地。夜の八時頃、夜まわりの拍子木の音が淋しく響くなか、私は嘉陵江を下つてゆく。昭化県の城郭の近く、嘉陵江と白水江が合流している所まで来ると、夜もかなりふけ、ただ一隻の舟旅は実に淋しい。凍れる様な月の光が波立つ川面に映つてきらきら輝き、一陣の風と共に川面の騒ぎが聞こえてくる。ああ、世俗の事に氣を囚われていたら切りがない。人生の恨みは果てしなく収まることを知らない。

淅淅風欺枕 明明月入船 淅淅として 風 枕を欺き 明明として 月 船に入る

三巴空有淚 獨夜不成眠 三巴 空しく涙有り 獨夜 眠りを成さず

流宕魚鳧國 淇其鴻鴈天 りゅうとう 流宕す 魚鳧の國 淇其なり 鴻鴈の天

故園梅信早 歸去逼殘年 故園 梅信早く 歸去 殘年逼る (「昭化夜泊」)

思わぬ風の音に眠りから目覚めると、一点の曇りもない明るい月が、船中に光を投じてゐる。遠く蜀の地を旅する我が身を思つては、空しく涙を流し、一人悶々として眠ることもできない。愁いに心しおれてこの魚鳧の国を旅する私は、渡り鳥の飛ぶ秋の空は寒く淋しく感じられる。私が再び郷里に帰れる頃は、すでに年も暮れ、梅の便りが早くも聞かれる頃だろう。

以上二篇は、嘉陵江を舟で下り、そば降る雨の中、昭化県に到り、そこで一夜を過した時の作である。いずれも全体

として情景を、漁洋得意の手法、つまり月を詠み、風を詠んでそこはかとなく淋しいイメージにまとめ、愁いを感じさせるが、しかし結びの二句「何限人間事、茫茫恨未平。」はやはり、ここ数年にわたる不幸に思いを馳せ、やり切れない自らを慰め、自らに諦めを促す、漁洋自身の心中から出た言葉であり、また「故園梅信早、歸去逼殘年。」の二句も、病身の妻が待つ故郷へ、できるなら早く帰りたいがそれもままならぬという、やはり漁洋の卒直な気持ちが托された言葉である点、つまり神韻を意識しながらも、具体的な思いが詩に表出来していることに注目したい。

次に、雍益集の一篇「晚至昭化縣、題孔令見野亭。」(『訓纂』卷十下)をあげる。前回と同様に舟で昭化県に行き、その夜、同郷でそこの県令である孔毓徳の見野亭に宿泊した時の作である。

葭萌朝挂席 弼棹欲三更 葭萌 朝に席を掛け 棹を弭めて 三更ならんと欲す

月上嘉陵水 山圍漢壽城 月は上る 嘉陵の水 山は圍む 漢壽の城

主人具雞黍 邀客啓柴荆 主人 雞黍を具え 客を邀えて 柴荆を啓く

修竹吾廬似 因之故國情 修竹 吾が廬に似たり 之に因りて 故國の情あり

葭萌を朝出發してから、棹を休めた時にはすでに夜中の十二時をまわろうとしている。すっかり高くなつた月は、嘉陵江の水面にその影を落し、山に囲まれた漢壽の城は、月光を浴びてぼんやりと望まれる。(私は船を降りて、県令の孔君を訪ねると)、彼は「馳走を用意し、柴の戸を開き、私を見野亭に迎えてくれた。背の高い竹の生えている庭の作りは、我が家の廬に似ている。ああ、途端に故郷が恋しくなつてしまつた。

葭萌は昭化県の東南、漢壽は同県の南。舟で嘉陵江を南に下つてゐる訳である。「吾廬」とは『香祖筆記』によると、漁洋の故郷の家の西第(西の屋敷)にある石帆亭のことである。その亭には大竹が多く生えていたとある。同郷の孔毓徳が、異郷の地でも故郷を思い出せる様に亭を山東省風に作つていたらしく、漁洋はその亭を訪れて、思わず郷愁の念にから

れたのであらう。この詩の第三聯では、孔毓德が漁洋をもてなした様子を描いているが、この様に特定の人物の動作が直接的に詠まることは、雍益集以前の詩にはほとんど見られない。また、鄉愁の思いを詠んだ第四聯も、蜀道集の「昭化夜泊」のそれと比べると、もの悲しい響きはなく、淡々とした詠みぶりである。

同じく雍益集の詩で、やはり故郷のこととを詠んだ作がある。これは、昭化県より少し南に下った漢州（四川省広漢県）での作、「漢州紀夢」（『訓纂』卷十下）と題する。

照壁孤檠不自聊<sup>(6)</sup> 壁を照らす孤檠 自ら聊<sup>はか</sup>らず

隔牕寒雨打紅蕉 脣を隔てて 寒雨 紅蕉を打つ

驚回一枕鄉園夢 驚き回る 一枕 郷園の夢

身在西川金鴈橋 身は西川金鴈橋に在り

一つの燈火がその身を尽す様に赤々と燃え、部屋の中を照らしている。窓の向こうでは、冷たい雨が美人蕉<sup>ひめばしょく</sup>に降り注いでいるのが聞こえる。その雨音に、故郷を夢にみていたひと眠りから、目が醒めてしまった。ああ、私は西川の金鴈橋にいるのだった。

西川は四川省の地を言い、金鴈橋は広漢県を流れる金鴈河に跨る橋、一名鴈橋ともいう。起・承句は、いかにも淋しげで寒々とした感じで、漁洋自身の心中がいかにも彼らしい口調で詠まれているが、転・結句では、その調子が一転して、夢から醒めた自分の存在を認識するという表現で、故郷を思う気持ちや、自分が随分遠くにいるのだなどという気持ちが、何の奇もなく卒直に歌われている。

蜀道集の「昭化夜泊」と雍益集の「晚至昭化縣題孔令見野亭」の作は、望郷の思いが詠まれているという点で偶然に一致しているが、その作風は、蜀道集の方が全体として神韻を強く意識しながらも、具体的に愁いが詠まれているのに

対し、雍益集の方は茫茫としたイメージではなく、また故郷への思いも、蜀道集に比べて淡々とした感じで、この傾向は「漢州紀夢」からも感じられると思う。確かに、病身の妻が待つ故郷を思う気持ちと、それから二十四年後、すでにその妻（康熙十五年没）も、そして母（同十一年没）、長兄士禄（同十二年没）、父（同二十四年没）も失って、すでに老境に至った、その時点での故郷に対する思いが、大きく異なるのは、当然のことではあるが、その違いが、これらの詩から読み取れるということは、漁洋自身の卒直な心情が、人生におけるそれぞれの時点で詩にも大きく反映し、影響をもたらしていたということではないだろうか。

### 三

漁洋にとって、三十九歳を中心とするその前後数年間は、相次いで愛する肉親を失うという、人生において最も痛恨の時期であった。従つて、その時期に一つの任を得て故郷を遠く離れた地で作られた蜀道集の詩は、神韻を強く意識し、様々な思いを心に秘めながらも、詩語を選んで美しく象徴的に歌うことに努めたであろう青年期の詩風から変化し、神韻を多分に意識しながらも、その時期の心の痛みが詩に表出するという変化をみせていく。つまり人との別れ、老いへの嘆き、人生の無常さといったものが、直接的に歌われるという傾向が、蜀道集にはあると思われる。

青年期から壮年期におけるこの変化は、四十三歳での妻との死別により、気持ちの上で一つの山を越え、更に変化をみせる。

雍益集の詩は、それから隔ること二十年、老境に入った漁洋にとって、再度の西国への旅は肉体的に大儀であったのに、そこに見られる詩は、具体的な愁いや嘆きは詠まれることが少なく、かえって人生を達観した漁洋の心の平穎さを感じられると思う。またその詩風は、青年期の研澄まされた感性が凝縮した様な神韻の作とは異なり、心の奥に鬱鬱と

した思いを隠したという無理もなく、淡々とした詠みぶりが、それまでの詩と違った美しさを自ずと感じさせている。

蜀道集と雍益集という、ある一時期の特殊な情況下で作られた詩を、壯年と老年期の代表として、漁洋の詩作全てについての変化を語るのは、いさざか独断的ではあったが、漁洋の理想とする神韻の作が、作者自身の心のあり方と非常に関係が深いと思われた為、以上の様に、漁洋の詩について大きく三段階の変化を認めた訳である。その後年において自覺的に「神韻説」を唱えた漁洋は、實際の作風においては、すでに青年期において、それを体現しており、その後は彼自身の人生が多分にその作風に影響を与えていた様である。その意味においては、漁洋の詩と人生も不可分のものであったと思う。

## 注

- (1) 本稿で取り上げた王漁洋の詩は、ほぼ惠棟の『漁洋山人精華錄訓纂』からとったもので、従つて詩にはその巻数を示した。  
詩の解釈はもとより惠棟の注に負うものである。
- (2) 漁洋は妻張氏の計報を手にした時（康熙十五年）、戸部四川司郎中として京師にあつた。
- (3) 本稿で取上げた二地点での詩を含め、他にほぼ同地点で作られたと思われる詩は、次の通りである。詩は旅程の進む順に列記した。

## 蜀道集

雨中度故關	『訓纂』卷六下	・	・	故關	『訓纂』卷十上
望見華山	卷六下	・	・	華山雜詩七首	卷十下
潼關	卷六下	・	・	風陵渡河抵潼關	卷十下
灞橋寄内二首	卷六下	・	・	灞橋・灞橋柳	卷十下
茂陵	卷六下	・	・		卷十下

鳳翔府

卷六下 · · ·

汧陽縣

卷十下

寶雞道中 · 寶雞縣

卷六下 · · ·

祀雞臺

卷十下

大安驛

卷七上 · · ·

晚至昭化縣題孔令見野亭

卷十下

昭化縣 · 昭化夜泊

卷七上 · · ·

漢州西湖 · 漢州紀夢

卷十下

題漢州驛壁

卷七上 · · ·

漢州西湖 · 漢州紀夢

卷十下

(4)

『精華錄訓纂』によると、『北史』王羆伝の次の話を踏まえるといふ。「神武・韓軌・司馬子如を遣はし羆を襲はしむ。軌の衆、梯を垂れて城に入る。羆身を袒ぎ、髻を露わし徒跣し、一白棒を持し大呼して謂て曰く、老熊道に当つて臥す、貉子那んぞ過ぐるを得んと。敵見て驚き退く。」

(5)

「雨中度故關」(雨中 故關を度る、『訓纂』卷六下)は次の通りである。

危棧飛流萬仞山

危棧飛流す 萬仞の山

戍樓遙指暮雲閒

戍樓遙かに指す 暮雲の閒

西風忽送瀟瀟雨

西風忽ち送る 瀟瀟の雨

滿路槐花出故關

滿路の槐花 故關を出づ

(6) 惠棟の注に『楚詞』九辨の「竊かに自ら聊らうして忠を願へば、或は黜さんてん点して之を汗す。」の句が引かれている。王逸の注に「意に死を竭さんと欲し、生を顧みざる也。」とあるので、「不自聊」は、わが身を顧みないという意味に解釈した。